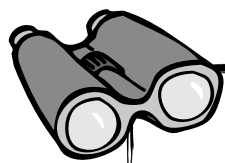




INDIA STUDY TOUR 2011

Report





インド スタディツアー 2011 年夏



フリー・ザ・チルドレン・ジャパン
東京事務所 連絡先はコチラ
Tel. 03-6321-8948
Email. info@ftcj.com

はじめに

はじめまして。(特活)フリー・ザ・チルドレン・ジャパンでは、2009年6月から貧困家庭の子どもが教育を受けられる環境を整えることを目的に、インド・ラジャスタン州ウダイプールに、学校と手洗い場を建設するキャンペーンをおこなってきました。そして、日本の子どもたちからの募金や、支援者からの寄付によって、2010年5月に目標としていた250万円が集まり、学校の建設がはじまりました。そして遂に、2011年4月に学校が完成しました。

今年のスタディツアーでは、その完成した学校を訪問し、村への医療支援として、ハーブガーデンの建設ボランティアを行ってきました。そして、この村の子どもたちとの出会いは、私たちに多くのことを教えてくれました。この報告書には、私たちがインドで見て、感じ、発見し、学んだこと、日本の多くの人々に伝えたいメッセージがたくさん込められています。この報告書を通じて、そのことが少しでも伝えられれば幸いです。

フリー・ザ・チルドレン・ジャパンとは？

■背景

フリー・ザ・チルドレン・ジャパンは、「子どもによる、子どものための」国際協力団体です。「Kids Can (子どもだからこぞできるんだ)！」を合言葉に、子どもによる国際協力活動を推進しています。

フリー・ザ・チルドレン (Free The Children) は1995年、カナダにて当時12歳のクレイグ・キールバーガー少年によって設立された国際協力団体です。

フリー・ザ・チルドレンのフリー (Free) という英語は、「解放する、自由にする」という意味です。つまり、「子どもを解放する、子どもを自由にする」という意味を持つ団体名です。

日本でもフリー・ザ・チルドレン (Free The Children) の活動を広めるため、1999年よりフリー・ザ・チルドレン・ジャパン (FTCJ) として日本での活動をスタートさせました。※政治的、宗教的な偏りは一切ありません。2004年9月にNPO法人を取得、設立しました。

■ビジョン・ミッション・ゴール

●FTCJが目指す社会

世界中の子どもが子どもの権利を侵害(しんがい)されることなく、心もからだも健康に育つことができ、自身の夢や希望を実現できる社会。そして、世界中の人々、特に子どもが権利を侵害(しんがい)されることなく、心もからだも健康に育つことができ、国籍・宗教・年齢・性別・文化に関係なく、互いを認め合い、互いに勇気付ける社会。

●FTCJの活動目的

- 1) 貧困や児童労働から子どもを解放する。
- 2) 子どもには社会や世界を変える力がない、という考えから子どもを解放する。

●FTCJの使命・役割

FTCJのゴール、延(ひ)いてはビジョンを達成するために、子どもが世界を平和にしていけるための活動を広められる環境づくりに取組みます。

インドってどんな国？



インド経済の急速な発展の影で、インドの市民の 40 パーセント以上は未だに貧しい生活を強いられています。「EFA グローバルモニタリングレポート」によると、インドは世界三番目に学校に通えない子どもたちが多く、500 万人の子どもたちが学校に通っていません。（1 位はナイジェリア、2 位はパキスタン）

人口：世界 2 位（12 億人）

面積：世界 7 位（日本の約 9 倍）

GDP：世界 11 位（1 兆 2 3 0 0 億ドル）

主要言語はヒンズー語・英語を含め 15 言語以上、紙幣には 17 言語の記載。

ヒンズー教が 80%、非暴力的な国民性。

【生産量】 石炭：世界 3 位

バナナ：世界 1 位

お茶：世界 1 位

お米：世界 2 位

お牛（頭数）：世界 1 位 * 3 人に 2 人が農業に関わっている

フリー・ザ・チルドレン・ジャパンが支援している地域について

- ・インド 西ベンガル州 コルカタから 25 キロ
Muktaneer 子どもの家 と農村地域
- ・インド ラジャスタン州 ウダイプールから 100 キロの農村地域

旅のスケジュール

8 月 6 日（土）	成田→ デリーへ
8 月 7 日（日）	デリー観光 NGO（BBA）訪問
8 月 8 日（月）	デリー→ アグラへ（タージマハル観光） アグラ→ジャイプールへ（ジャイプール観光） 夜行列車でウダイプールへ出発
8 月 9 日（火）	ウダイプール着 FTC の支援先の村（ライ村）を訪問 FTC の支援事業についてのオリエンテーション ボランティア作業をするウダウド村に到着 夜のワークショップ（教育について）
8 月 10 日（水）	朝のヨガレッスン 村の伝統儀式に参加 ガーデン建設ボランティア ヒンディー語レッスン 夜のワークショップ（医療について）
8 月 11 日（木）	朝のヨガレッスン ガーデン建設ボランティア 村の子どもや人々と交流 ヒンディー語レッスン 夜のワークショップ（水について）
8 月 12 日（金）	朝のヨガレッスン ガーデン建設ボランティア 閉会式 夜のワークショップ（収入向上について）
8 月 13 日（土）	ウダイプールへ出発 働く子どもに会う ウダイプール→ デリー デリー→ 成田へ
8 月 14 日（日）	日本へ帰国

FTCJ インドスタディツアー 2011 夏 参加者&スタッフ紹介①

KIDSCAN

山田 梨乃
(りのちゃん/中学生)



FTCJの文通プログラムでインドの子とも文通してるので興味もあったというのも参加理由の1つです。

☆インドの第一印象

カレー(笑) やっぱり辛かったです。さすがインド。インドは貧富の差が激しいイメージでした。

☆振り返り

児童労働や貧しいインドの状況を目で確認したり体で体験したりして、すごくショックでした。TVやインターネットなどで調べて情報を得るより実際に見たら、どの瞬間もとても衝撃的でした。でも子ども達の目と笑顔が輝いていて、かわいくて、とても元気をもらいました。

あの子どもたちと過ごした時間が何よりの宝物になったし、幸せで貴重な時間を過ごせました。生きる勇氣や何事にも頑張る気持ちであったり、たくさんのことを教えてもらいました。

周りの方々からもたくさんのサポートを得て、改めて私はいろんな人に支えられてると感じました。子どもたちや周りの方々、ウダワド村などの方たちに『ありがとう』という言葉では表せないほど感謝しています。

KIDSCAN

Zane Garrett Halverson
(ゼイン/高校生)



☆参加理由とインドの第一印象

一緒にツアーに参加したデビットさんがこのツアーを誘ってくれたことがきっかけです。そして、今まで参加したことがなかったスタディーツアーがどのようなものなのかを経験する為に、そして人々を助ける為に何かをやってみたいと思い、参加を決めました。

スタディーツアーへの参加は初めてだったので、到着した時、正直、何を期待するべきかわかりませんでした。そして到着した時、ものすごく驚きました。私のインドにおける最初の印象は、全く現代的な場所ではないという事でした。最初に到着した時その貧困のレベルに驚きました。私は廃墟となった建物と、そこで暮らしている多くの人々の生活水準の低さにショックを受けました。

☆振り返り

このツアーでは、多くの新しい、そして私と全く異なる経験を持った人々と出会いがありました。私は子ども達と過ごす時間が大好きでした。学校では子ども達と音楽の演奏をとでも楽しめました。子ども達は私が演奏した歌を知りませんでした。彼らは同じ様に楽しんでくれたと思います。願わくば、私たちがこの旅で行った支援が、彼らの将来にプラスになってくれればと思っています。

帰国後は、私はたくさんの友人にインドでの経験を話しました。そして今後も彼らに話し続けていこうと思います。

KIDSCAN

Jhonathan Kent
(ジョナサン/高校生)



☆参加理由

人助けをしたいと思っており、今回のツアーはとてもいい経験になりました。

☆インドの第一印象

まるで紛争地帯のようでした。あちこちで瓦礫が見られ、大きな銃を持った兵士もいました。この国が貧困で苦しんでいる事は明らかでした。道路は未舗装で運転手は規則を守っていない感じがしました。インドでの優先順位でテクノロジーというものは上位にはないようです。時に道路を動物が自由に歩き回っているのが気になりました。主に牛は邪魔でした。

☆振り返り

具体的に行動することができたのでよかったと思います。ハーブ・ガーデンでの作業は体力的にも大変でした。印象に残っていることは、インド人は協力し合わないと感じました。貧困という状況下では自分のことに精一杯になるのかもしれない。

自分がいかに恵まれた環境にいるかがわかりました。またインドに行く機会があれば行ってみたいです。

三箇山 志織 (しおりちゃん/大学生)



☆参加理由

インドの農村での NGO の活動をプランニングする学生コンテストにて、実際のインドを見てみたいと思ったのでスタツアに参加しました。文字上のインドではなく、実際に 5 感でインドを感じたいと思います。

☆振り返り

インドの文化や社会を実際に見たり聞いたりすることは驚きを伴うこともありましたが、その驚きを忘れず、実際にインドに行ったことのない人にも伝えていけたらと思います。

インド人の顔は怖かったですが、出会った人は優しい人が多く、「インドにまた行きたい！」そう思わせてくれるような国でした。

佐藤 美紗子 (みさこちゃん/社会人)



☆参加理由

インド初訪問。世界第 2 位の人口を持つ大国を市場規模、市場の成長性の観点から、日本企業はもちろん世界中の企業がターゲットとしている魅惑の国。そんな経済成長の中で生じる児童労働や社会問題についてもっと知りたい、感じたい、そして毎日 3 食本場のインドカレーを食べたい！そんな思いで参加しました。

☆旅の振り返り

土埃にまみれたぼろぼろの制服、お風呂に入っていないボサボサの汚い髪、栄養不足を表す黄ばんだ目、細い手足にはもちろん靴ははいていない……。写真を見て、途上国の子どもたちをこんな常套句で表すことはできる。しかし今回、1 日 1 ドル以下で暮らすウダワド村の子どもたちと触れ合い、同じ時間を共有したことで溢れんばかりの元気や輝きを体感し、自分の心が揺さぶられたことは忘れられない。

また、子どもたちは楽しそうに成長し、たとえ裸足で栄養不足でも“一応”生活は成り立っているように見えた。しかしその裏で何が起きているか、根深い本当の問題をもっとしっかり見つめて行動したいと思う。

飯塚 景介 (けい/社会人)



☆参加理由

今年の 4 月に FTCJ が支援する小学校がウダワド村に建設され、その建設費の寄付のため、FTCJ の開催するチャリティーコンサートにボランティアで参加したり、自分で主催した LIFE IMPACT というチャリティーイベントの収益を寄付したのがきっかけです。

また、今回のようなツアーは初めてで普段観光で行けないような体験ができるどころに、興味がありました。実際に現地に行くことによって知識だけではなく、体感することによってその影響が今後の人生に活かせると思ったからです。

☆振り返り

今回のツアーはとても充実していました。普通の観光では体験できない学びがたくさんあり、一週間が長く感じました。まずインドの印象というのは思った通り、厚くて少し湿気があり、街中はバイクなどが多めで道はたくさんの車でごった返し。物乞いの子どもやその母親が路上で車の窓を叩いていたり、牛は神聖な動物のため触ったりしてはいけないということが僕にとっては初めてでした。しかし今回のライ村やウダワド村に関しては町から離れており、車で 1-2 時間走った山奥にある場所だったのでディーとは大違いでした。

一つに生活環境の違いです。裸足の子が多く、服も一人一枚から二枚。チャパティというパンが主食でありおかずはないので、それが栄養失調になる原因になるようです。水は井戸に汲みに行くし、学校に行けない子は多く、医者やスーパーなどは街に出ないといふ。街と言っても車はないから歩いて何時間もかかる。日本にある当たり前のようなものはほとんどないです。

でも現地の人はそれが当たり前。その地域に住んでいる子達に将来の夢を聞きました。みんな手をあけて、医者になりたい、学校の先生になりたいと声を張って元気よく発言します。

今回の旅は、人生には何が必要なのか、何があれば充実した生き方ができるのか深く考えることができました。そして一緒にツアーに参加したみんなとのコミュニケーションによって協調性も学びました。た文化の違いを知ることができました。この経験を通して、日本だけでなくいろんな国々、いろんなで活かせたらと思います。

FTCJ インスタディツアー 2011 夏 参加者&スタッフ紹介②

KIDSCAN

猿渡 晴子
(はるこさん/社会人)



☆インドの第一印象

スタツアへの参加を決めてから、ガイドブックやインドの紹介本を数冊あわせて読みました。そうして出た結論は、「常に警戒し準備は万端に！」という悲壮なものでした。が、デリー空港での第一印象は「な〜んだ。ほかの都市と変わらない！」というものでした。ほっとすると同時に空港内のインドの人々を見るにつれ、これからの旅行が楽しみになるような感触を得ました。

街中をバスで移動する際にはインドの厳しい状況を目の当たりにすることもありましたが、ツアー中にインドの人々と少しずつ関わっていくうちに、人々の持つパワーや人間臭さ、国の持つ熱気のようなものを感じ、出国前に持っていたインドへの不安感のようなものは完全に払しょくされていきました。一言でいうなら、「インドは面白い！」そしてその面白さはインドの人々から来ているものだとは思っています。

☆この旅をふり返って

「インドにはまた行きたい！ウダワド村のその後が知りたい！かわりたい！」ということとツアー参加者や現地でお世話になった方々、村の人々など「人との出会いに恵まれた」ことへの感謝です。FTCJのスタッフの豊富で正確な知識に裏打ちされた献身的な活動とその成果にはただただ頭が下がります。また、ライ村で出会った村の女性たちの自信に満ち溢れた美しさには圧倒されました。まだ今回体験したことを言葉で表せるほど消化しきれている訳ではありませんが、これからじっくりと、この後私にできることを考えていきたいと思っています。

☆参加理由

今まで知識としてのみ知っていたインドの状況を実際に見てみたいという理由からです。大学院時代に児童労働に興味を持ち、FTCJにたどり着きました。長い間、送られてくる活動報告やメルマガを通してのみのかわりでしたが、今回10年目にして縁があり、ツアーに参加させていただきました。

KIDSCAN

David L. Smith
(デイヴィッド/社会人)



☆参加理由と振り返り

みなさんとは違うかもしれませんが、私の教会がフリー・ザ・チルドレンと関わりを持つためにツアーで情報を集め、教会へ報告するためです。最初の印象は貧困で不衛生な環境で生活しているのを見てショックでした。今まで行った旅行の中でもひどいと感じました。

しかし、ツアーはとても楽しかったです。私は欲しいと思ったものや必要なものを手にすることができ本当に恵まれていると思いました。

☆印象に残っていること

貧困から抜け出したいと思っていてもなかなか無理な状況だと思いましたし、彼らもどうしようもないと思っているのかもしれませんが。インド政府が何もしないこともかなしいことです。

☆これから何をしますか？

インドの人々のために祈りを捧げます。

KIDSCAN

伴野 保志
(トムさん/社会人)



☆参加理由

今回で5年連続のインド訪問。
またインドの子どもたちに会いたい一心で参加。
スタツアの参加者のみなさんのサポートを少しでもできたらと思いついてまた参加。
やっぱりインドは奥深く、底知れない不思議に満ち溢れていました。

☆振り返り

繁栄の陰の貧しい人たちの状況は何も変わっていなかった。
あんなに素晴らしい笑顔の子どもたちに出会えて最高に幸せな体験でした。

一言では言えない程、いっぱい教えてもらったことがあります。
一生わすれせれません。ウダワド村の人たちは、とても暖かく接してくれて
いっぱい感謝しています。

町井 望 (のんちゃん/FTCJスタッフ)



☆10年ぶりのインド

今回は、引率するスタッフとしてツアーに参加したのですが、私にとっては10年ぶりのインドへの渡航でした。

10年前、高校生だった私は、1歳年上のクレイグが児童労働を世界から無くすためにNGOを立ち上げ、活動していることを知り驚き、「とにかく自分も世界を見てみたい!」その一心で、フリー・ザ・チルドレン主催のインドのスタディーツアーに参加しました。

その時は、インドの街の臭い、そこかしこで出会う物乞いの人々、インド国内の貧富の格差、そしてインド人の生きるエネルギーに圧倒されたのを覚えています。自分がいかに恵まれた環境で生きてきたのかを、初めて実感したのもその時でした。でも、日本に帰ると、インドで見てきたことがまるで嘘かのように、普通の日常がはじまる。そのインドと日本にいたときの自分の生活のギャップに疑問を感じました。

インドに行く前から、世界の貧富の格差については、学校やニュースを通じて知っていましたが、当時の私は「子どもの自分はまだ何もできない、勉強して準備を整えて大人になってから関わるもの」という考えでいました。ですが、同世代の仲間やクレイグと共にインドへ行き、学校建設のボランティアに参加する中で、「自分にできることを今からやってみよう!」という考えに変わっていったのです。

今回、10年ぶりに大人になってからインドへ行って思うのは、世界のことをどれだけ勉強しても世界の問題を解決するための準備が整う日など来ない!ということです。むしろ勉強をすればするほど、動けなくなってしまうような気がします。

もし、私が高校生のときに、フリー・ザ・チルドレンに出会わずに勉強だけをしていたら、勉強しているうちに私は行動することをやめてしまったかもしれません。10年前のツアーが私にとっても、行動おこすきっかけになったように、今回のツアーの参加者の中にも帰国後にすでにアクションをお越している方が何人もいます! 私にとっては、それが何よりも嬉しいことです!!

「世界を変えるために、まずは自分が変わり続ける!」それを胸にこれからも、活動を続けていきたいと思います。

天野 Faith (フェイス/FTCJスタッフ)



去年に引き続き、ファシリテーターとして参加しましたが、今回は自分にとって2度目のインドだったので、新しい発見がまだまだたくさんありました。

今年は年齢層も去年に比べて広く、また、日本人と在日アメリカ人の混合グループだったので、色々大変になるかとも思いましたが、インドだけではなく、日本とアメリカの文化の違いに気が付いたり、考え方の違いをお互いに分かち合ったりする事によって、結果的にとても素晴らしく、成長する事が出来た貴重な体験になったと思います。

また、個人的には去年作り始めた学校が完成していて、とても感動しました。去年何もなかった場所に、日本の人たちの募金によって建設資金が集まり、現地に行ける人たちで建設を始め、他の国の人たちも交代で現地に行って建設作業をして、みんなで協力して完成したという事がとても嬉しいです。何かをあげて終わる、一回だけの寄付ではなくて、世界をより良いものへとする、「維持できる変化」をみんなで力を合わせて作りました。

今年は医療の自立支援として、マラリアなどを予防するためのハーブ・ガーデンを作り始めました。時間の関係で、私たちのグループが完成させる事は出来ませんでしたが、他の人たちがそれを引き継いで完成させるのも、今からとても楽しみです。人それぞれに出来る事があると思います。これからも、みんなでそれぞれが好きな事をしながら、世界をより良いものへと変え、貧困や搾取が、金銭的、肉体的、そして精神的にも世界中からなくなるように一緒に活動して行きましょう!

また、日本語では「百聞は一見にしかず」と言いますが、英語だと「A picture is worth a thousand words」と言い、「一回見る事は千の言葉の価値がある」と言われています。自分で実際に行った事によって、視野も考えも価値観も広がりました。みなさんも是非スタツアに参加してみてください。



ラウル
(ガイド・通訳)



ラジディープ
(Me to We スタッフ)



ブランドン
(Me to We スタッフ)

■ NGO 訪問

BBA (Bachpan Bacjao Andolan) というインドの児童労働させられている子どもを解放する NGO を訪問しました。

この NGO はフリー・ザ・チルドレン (FTC) 設立者のクレイグが初めてインドに来たときに訪問した NGO で、子どもを児童労働から解放し、その後、施設でリハビリテーションを行っています。ほかにも、グローバルマーチという児童労働反対を訴えながら町を歩く活動や、「子どもに優しい村」をつくることなどもしています。

私達が訪問したのはデリー郊外の Mukti Ashram という短期間のリハビリテーションのための施設です。

到着すると、スタッフの方から BBA やインドの児童労働の現状の説明を受けました。

児童労働は世界的に禁止されていますが、インドではまだ児童労働が行われています。多くの児童労働は「学校に行かせてあげる」と言われて働きに出ると、実際は学校に行かせてもらえず、児童労働させられてしまうことが多いそうです。

BBA ではこの子どもたちがまた児童労働をさせられることがないように、ヒンディー語の教育だけでなく、教育を受ける権利が子どもにはあることやインドの教育制度についても教え、児童労働がまた起きないようにしているとのことでした。

お話を聞いた後は、施設を見学させてもらいました。教室には生徒たちの書いた様々な絵が描いてありました。また、他の部屋にはクリケットのワールドカップ選手が贈ってくれたクリケットのラケットも置いてありました。またその部屋の壁には鳥かごのようなものに入った少年の絵が描いてあり、これは児童労働していた過去を忘れないようにと描かれたものであるそうです。

昼食の後は子どもたちのいる教室へ行きました。スタッフメンバーが自己紹介した後、数人の子どもの過去の話を聞きました。自分の年齢すらわからない子もいました。



救出された子どもたちから体験を聞きました

その後、子どもたちに様々な質問をしました。「将来の夢は？」という質問に対して、子どもたちがみんな手を挙げて「医者」や「先生」などと答えてくれ、数か月、数週間前までは児童労働していた子どもでも将来のことを考えているということに驚きを隠せませんでした。

また、子どもたちがダンスを踊ってくれたり、歌を歌ってくれたり歓迎してくれました。私達も、ガイドさんに教えてもらったヒンディー語の歌と ABC の歌を歌いました。最後に全員で集合写真をとって、BBA の子どもたちとお別れをしました。(しおり)



鳥かごのようなものに入った少年の絵



ダンスや歌で歓迎してくれた子どもたちと一緒に！

■インド門

日曜日であったせいか、日が傾く頃から家族が連れ立って歩く姿が路上に多く見られるようになり、私たちが到着した5時頃には、インド門は家族連れや友達グループなど、多くの人たちでにぎわっていました。

インド門とは、第1次世界大戦で戦死した兵士の慰霊碑です。大きな門で、一直線に大統領官邸と結ぶ道路が走っています。一帯は公園のようになっており、独立記念日やお祭りが近いせいか、兵士が厳重に警戒を行っていました。人出が多いので、子どもたちが喜びそうなお土産物やアイスクリーム屋さんがたくさん出ていました。ガイドのラウルさんにインドらしいフレーバーのアイス教えてもらい皆で買って食べました。私が食べたのは、Kulfi (クルフィ) のピスタチオ味でした。

ただ、残念ながらアイスクリームの味はほとんど覚えていません。というのも、私たちがアイスを買っているところに、小さな男の子が現れ「アイスを買って」とせがみだし、その子が見ている前でアイスクリームを食べることになったからです。

日本人の私にはアイスを買ってあげることは簡単なことです。けれど、買ってあげるという行為がその子にとって何を意味するのかは、インドや貧困ということを本当に理解していない私には想像もつかないことです。うかつなことはできません。困惑と悲しさの入り混じった味のアイスとなってしまいました。

その後この男の子は、ガイドのラウルさんの袖をしっかりと握りしめ、「アイス、アイス」とせがみながらついてきました。途中で追い払われたりしていましたが、私たちがインド門を見て、駐車場に戻ってくるころにまた現れ、とうとう念願のチョコレートアイスをラウルさんに買ってもらいました。写真はやっと買ってもらったアイスを美味しく食べているところです。



アイスを買ってもらうなり、一目散に走り去った男の子

この子の粘り勝ちでした。アイスを買ってもらうということは、この子の置かれた状況について根本的な解決にはつながらないでしょう。でも、この子の満足そうな顔を見ていると「良かったね。やつぱりアイスは美味しいよね。食べたかったよね。」と、ほっとした私でした。

また、インド門ではインドの人々の愉快な一面も発見しました。同行者の一人は髪を青く染めて黒ずくめの格好です。インドの人々は、その髪の色と出で立ちにロックスターでもイメージするのか、容赦ない視線をその髪に浴びせ、何重にも取り囲み、次から次へと記念撮影を依頼していました。

私の見たところ、インドの人々はとても好奇心旺盛で、珍しいものにストレートな反応を示してしまうようです。また、音楽が大好きで陽気な一面を持っているようです。行く先々で、彼がギターを持っている時は必ず「ギターを弾いて！歌って！」と言われていました。翌日、夜行列車を待つ駅のプラットフォームでも人々に取り囲まれミニコンサートとなり、またとない経験をしました。（はるこ）



スタツア参加者の女性陣で記念撮影♪



インド人に記念撮影を求められるフェイス。人気者です。

2011.8.8(Mon) タージマハル

■世界遺産を観光

タージ・マハルは、ムガル帝国帝王シャー・ジャハーンによって、彼の三番目の妻のお墓として、17世紀に22年もかけて建てられ世界遺産です。真っ白の大理石を使い、信じられないほどの大きさで、壁にはつると花の複雑な模様が彫刻されています。

タージ・マハルは僕がインドで見た建築物の中で最も素晴らしかったです。インドでは大きな薄茶色の建物や小さく美しい寺院などもみましたが、このタージ・マハルはそれらを一気に組み合わせたような感じがします。外から見ると本当に見事でしたが、建物内を見ると広々とした空間だけが広がり、真ん中に棺があるだけで、すこし寂しい気分になりました。(Jonathan)



王様が王妃のために建てた大きな大きな愛のお墓！



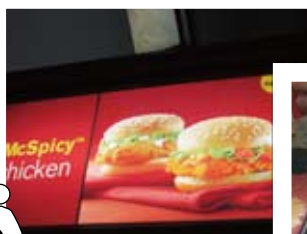
22年の歳月をかけて建造したといわれています。

2011.8.8(Mon) ジャイプール

■マクドナルド

ジャイプールでは、皆でお昼をマクドナルドで食べましたが、僕がこれまで食べていたマックとはかなり違っていました。ビーフがメニューにないので、このマクドナルドは僕がビックマックやチーズバーガーを注文できなかった唯一のマックとなりました！僕はスパイシー・チキンラップを注文したのですが、本当に辛かったです！！

ランチの後おバスに戻って移動です。街中では、いまやお馴染みの光景となった半分壊れかかったような建物をいくつも通り過ぎました。お昼を食べている間に、スコールがかなり激しく降ったせいか、これまで僕が時々感じていたような街の臭といったものはあまり感じませんでした。道路は相変わらずの渋滞で、そして、相変わらず車のクラクションは絶え間なく鳴り響いていました。(Zane)



風の宮殿にて記念撮影！



湖の真ん中にある宮殿 (レイクパレス)

■デリーからウダイプールまで、どきどきの(?)寝台列車！

デリーからウダイプールまで、どきどきの(?)寝台列車！

私たちは、駅までの道のりをバスで移動しましたが、暗くて嵐のような夜でした。このような場所は初めてで、バスに乗るのに地下を下りていかなければならないような感じがしました。昼間はクラクションの音などで騒がしかったのですが、夜は薄暗く雲と雨だけでした。ウダイプールへ向かうために駅に向かって静かにバスは走りしました。

インドの駅は東京の駅とは違いました。暗く、標識なども少なく、荷物を持って通路を歩いていると何百人という人がいたのです。彼らは電車を待っているのではありません。駅のコンクリートの汚れたところで寝る為です。男性だけでなく家族もいます。行くあてもなく冷たい地面で身を寄せ合って寝ていました。私は家のきれいなベッドを思い出しました。多くの人がこのような状況で寝ていることなど今まで考えもしませんでした。私のキャンプの寝床の方がまだましだと思いました。

日本のようにエスカレーターがないので、スーツケースを持って何段もの階段を上ったり下ったりしました。私たちは予定より2時間も早く着いたので時間を潰していました。プラットフォームにはたくさんのインド人がいました。手に持っているのは、私たちが持っているスーツケースのようなものではなく、ずた袋や買い物袋のようなかばんでした。私たちはゲームをしたり、チームリーダーのフェイスとチー

ムメンバーのゼーンがギターを弾いたり歌を歌ってくれたりして楽しかったです。

数分もすると100人以上の人たちが私たちの周りに集まってきました。不思議な感じでした。9割は男性だったのでメンバーの中にはちょっと怖がっている人もいました。多くの人が手拍子をしてくれました。ある男性がギターを弾きたいと言ってきたのですが、断られると少し歌を聞いて立ち去って行きました。誰かが「リッキー・マーティンの曲を！」リクエストしてくることもありました。

そうこうしているうちに電車が来たので荷物を持って乗り込みました。私たちは寝台列車に乗りました。自分たちのベッドを探していると電車は動き始めました。私のベッドは上の方にありました。電車の静かな揺れとリズムカルなレールの音ですぐに眠りにつくことができました。

ウダイプールに6時半に到着し、私たちを引率してくれるブランドンさんとラジディープさんに会いました。深夜特急の旅は終わりです。もう一度乗りたいか？と言われたらわかりませんが、インドでこういう経験ができたことはよかったと思います。そしてインドでの生活は大変だというのがわかりました。アメリカや日本での生活は本当に恵まれていると思いました。(David)

エアーインディア

インドへの飛行機の旅は、特に目新しいことはありませんでした。行き帰りの飛行機では、寝る前に少し本を読んだぐらいで、ほとんど寝ていました。機内食は予想どおりぜんぜん美味しくなかったです。飛行機のシートはかなり良いと思いました。映画は新作がそろっていて、僕はいくつか見てみました。

インドの国内線ではこのようなことはなく、全て Bollywood 映画でした。飛行機の中で一番印象に残っていることといえば、日本へ戻って来る時にフライトアテンダントが日本語ではなく、韓国語の入国申請書を配り始めた事です。日本人と韓国人の違いが分からなかったようです。(Zane)



■自立した女性の力で開発すすむ！

初の夜行列車に乗ってジャイプールからウダイプールへ。ここではFTCが支援するライ村にある中の一つの学校を訪問。

子ども達や先生方に迎えられ、最初に支援される前に建てられた小さな学校を見学。日本でいう物置小屋のようで、大きさは45畳程度で床は土。雨が降れば水浸しで、光もあまり入らない状態。そんな小さな学校だが、村人達が力を合わせて作られた大事なものの。自分たちを守るために教育が必要だとして建てられました。その小さな学校は残し、学校を新設。当時は生徒10人だったものの、4年経った今では約160人まで増え、今年初めての卒業生がいます。

1～2年生の教室にお邪魔して子ども達と遊んだり、教科書を一緒に読んだりしました。みんな元気でとても輝いていました。

日本とは違い、この地域はワクチンなどは接種していないので、健康的に過ごすのは大事なことです。そこで健康やマラリアなどの病気の特效薬としてハーブを育てています。少し分けて貰いましたが、飲み込めないくらい苦い。医療に関しては病院が遠いので学校にて月一回診てもらおうことができるそうです。衛生面ではトイレにも気をつけています。建造費が少し高くても清潔に保つためにタイルが使用されています。

そして収入向上プロジェクト。収入が1ドル以下のこの地域では子ども達が働かざるを得ない状況があります。また女性は働くものではなく家事をするという風習があるようです。このような状況下で女性に出来て無理のないものということでゴート（ヤギ）の飼育が選ばれました。収入源はミルクと肉など。いい血筋を合わせて、300mlが1リットルになったりと努力をし、生計を立てられるようになったそうです。

このプロジェクトに参加している女性4人にお話を聞きました。夫から了解を得ないと外に出してもらえないような女性達が自ら立ち上がり、今では自信に満ち溢れ日々生活していることを感じました。（けい）



2011.8.9(Tues) ワークショップその1 教育について

■世界では7200万人の子どもが学校に通っていません……

英語と日本語でそれぞれ行なう各5人ずつからなる2チームにわかれてゲーム形式で、「教育について」学ぶ基礎的な開発についてのワークショップをおこないました。

いくつかのプログラムが選択形式で用意されていて、それらを繰り返して行い、獲得した点数で、どちらのチームが先にゴールに達するまでおこないました。

プログラムは、以下の内容です。

- ・男性と女性のチームに分かれてワークショップをスタート
- ・チームで、いくつかの挑戦しなければいけない項目にいくでいく。
- ・例えばその中には、1人が他のメンバーを背負って、ゴール地点まで運ぶ。など
- ・何枚かのメッセージカードを読み、順序立ててストーリーを組み立てる。

（メッセージカードの例）

「あなたは幸運にも、あなたが住んでいるコミュニティにある学校に通うことが出来ている。ティーンエイジャーの女の子です。あなたは中等教育を受けるべき年齢で、学校に通っている50%のひとりです。」

- ・数字が書いてある紙切れが20枚程度渡され、ひとり目は目隠しをして、それらを下一桁の数値の紙切れにグループ分けする。他メンバーは、それらを言葉だけで、彼に手助けする。
- ・教育に関する基本的ないくつかの質問に対して、解答する。

最後に、1人ずつ感想をシェアし合い、ワークショップを終えました。このワークショップは、チームワークが試されていて、それを体験することにも主眼が置かれているものでした。

また、基礎教育の大切さ、例えば識字教育の大切さを体験したり、児童労働に関する情報なども学ぶことが出来るようになっていました。（トム）





昔の学校。窓も電気もないので暗くて雨漏りもする



寄付でできた新しい学校。



活き活きと仕事の話をしてくださった村の女性



ウダワド村小学校のトイレ ↑ →



2011.8.10(Wed) ウダワド村について

■南インドの約 140 世帯が暮らす村を訪れました

ラジャスターン州のこの地域では、一年の内3ヶ月しか雨にめぐまれず、農業と家畜の収入では十分な生計を維持することが困難で、苦しい戦いを強いられています。干ばつによって農地が破壊され、不衛生な飲料水により病気が流行し、雨の降らない9ヶ月は、農作物をつくれないので、人々は、道路工事や町へ出稼ぎして飢えをしのいでいます。

多くの家族が彼らの全ての子どもたちを学校に通わせることができません。特に女の子は教育を受けなくてもいいという偏見から女の子たちが学校から締め出され、早婚の問題が発生しています。

私たちフリー・ザ・チルドレンは、インドで Adopt a Village(村の自立を応援しよう!) プログラムを立ち上げ、支援対象地区の貧困地域の村や人々とパートナーを組んで、村人が貧困から解放され自立できるよう活動を行っています。

この村の自立を目指すプログラムには、自立に向けた4つの柱があります。それは

1. 村の子どもが学校に通えるよう環境を整える。→学校建設事業
2. 村の人々が衛生な飲み水を確保できるよう環境を整える。→井戸設置事業
3. 村の人々が健康的な生活を送れるよう環境を整える。→保健・健康センター設置事業
4. 村の人々が安定した収入を得られるよう環境を整える。→収入向上支援事業 です。

FTCIでは、このインドのウダワド村の自立に向け、2009年から支援活動を開始し、柱の一つである「学校建設事業」のために募金活動などを行い、念願の村の子どもが通える小学校を2011年4月に完成することができました!!

しかし、まだ1つ目の柱しかクリアしていませんので、ウダワド村の自立に向け、まだまだやるべきことはいっぱいあるのです。9日に訪れたライ村は、かなり開発支援が進んでおり、ウダワド村にとってモデルケースとなる村となっています。

そして、学校へ登録している子どもたちは85人ですが、実質的に通えている子どもたちは平均55人から60人で、特に女の子は、そのうち30%〜25%にすぎません。

5学年までの初等教育を終了できているのは、さらにそのうちの10%〜15%です。

今年2つの教室ができましたが、先生は2人で、まだまだ足りません。トイレも古いままです。保健デイケアセンターによる、保健と健康のケア、就学前の子どもたちのケアも必要です。人々の収入向上のためのプログラムの提供は、さらに次の大きな課題として残っています。

FTCIは、これからもウダワド村に、続けて関わっていく責任があるとおもいます。引き続き、みなさまのご支援をよろしくお願いいたします。(トム)

2011.8.10(Wed) インドの伝統儀式

■新しいことを始めるとき、うまくいくように祈ります

ウダワド村に今年4月に新しい学校ができ、今回は学校に通う子どもたちが健康でいられるためのハーブの栽培が出来るようにガーデンを作ることになりました。その儀式は「Pooja(プージャ)」と言って、ガーデン作りがうまくいくように神に祈るために開かれました。いつもは2〜3時間かけて行うそうです。

僕も参加させてもらい、花や食べ物、石などを使い、歌を歌い、いくつかの神をまつりました。最後はその石をこれから始めるガーデニングの場所へ置いて終わりです。

初めての民族的な行事だったので、新鮮さ、不思議さが混じった体験が出来ました。(けい)



ヒन्दウ教の神様・ガネーシャへのお祈りなどしました

2011.8.10(Wed) ハーブガーデン作り

■ウダワド村の子どもたちの健康のために活動しました！

ウダワド村ではマラリアなどの病気予防などのためのハーブを植えるハーブガーデン作りしました。

ハーブガーデンは小学校の敷地内にあり、もともと小さいガーデンはあったのですが、それを3倍の大きさに広げるため、土を掘り返す作業、柵になる岩を割る作業、もともとあるガーデンの雑草を抜く作業、掘り返した土を運ぶ作業、新しく土を運んでくる作業をしました。

作業は5日目の午後と、6日目の午前中の2回行いました。天気は曇っていたり、晴れたり、雨が降ってきたりと安定していませんでしたが、雨が降ってきたら屋根のあるところに行ったり、晴れてきたら帽子をかぶって水分をちゃんと取ったりと、臨機応変に対応しながら作業を進めました。

まず、作業を始める前に準備体操やゲームをして体をほぐしました。また、安全のために道具や作業の注意事項を聞いてから作業を始めました。



村の人が見に来ました。何をしているか気になるようです。

作業をしているときに村の人が何度か見にきていました。また、抜いた雑草を牛に食べさせるために、牛を連れてきている女性もいました。作業をずっとみていた男性は、「男女一緒に作業しているのが驚きだ」と言っていました。

昨年学校を作ったときは女性が働くことで村の女性に勇気を与えたという話を聞いていましたが、女性に勇気を与えるだけでなく男性にも男女の平等といったものを感じてもらえたのではないかと思います。

ガーデンを作る作業は最後まで終わらせることはできませんでしたが、村の人に女性が働くこと、男女一緒に作業するという男女の平等というものを感じてもらえたということも、このスタディーツアーがウダワド村に与えた一つの成果だと思います。(しおり)



和気藹々と草むしり、土起こしなどの作業をしました！

■世界の水のこと、知っていますか？

ウダウド村で過ごした初日。夜はファシリテーターのBrandonとFaithが中心となり、医療についてのワークショップが行われました。医療はフリー・ザ・チルドレンが掲げる4つの目標（教育の向上、衛生的な水、医療、収入向上）のうちの一つです。

まず、4人に、ある人物のプロフィールと状況を書いた紙が渡されました。私の状況はこうでした。65歳女性。息子と村に住む。村から一番近い病院は45km先。洗濯が仕事で、家事をして過ごします。炊事や洗濯に必要な水を得るためには数キロ先の井戸まで行かなくてはなりません。母親も私も学校に行ったことはありません。母も私と同じ仕事をしていました。父は畑で働いていました。早くに結婚をさせられました。孫には学校に行きたくて欲しいと思っています。

次にファシリテーターが皆に質問をしていきます。紙を渡された4人は紙に書いてある状況どおりに、それ以外の人は自分のことに照らし合わせて質問に答えていきます。

質問は例えばこのようなものでした。「自分が60歳以上であれば後ろに下がって下さい」「男性であれば前進、女性であれば後退」という自分のプロフィールに始まり、危険な仕事に従事しているか、持病はあるか、救急の際に病院が近くにあるかどうか、健康保険の有無、健康に関する情報へのアクセスの有無、栄養状況、親、特に母親の教育レベルについての質問事項もありました。また、住環境や生活環境（ごみの収集や下水道の整備）など質問は多岐に渡りました。

これらの質問にそって、それぞれが前進したり後退したりするのですが、質問終了後、私の置かれた状況では一番後ろに位置することになりました。つまり皆の背中を見ている状態です。そして先頭の人の背中からは遠く、最後部の私とは部屋の端と端に分かれている状態でした。

この活動に対しての感想は、「自分たちは恵まれている」という意見が大半でした。私はそれに加えて女性であるということはハンディを背負っているのではないかと思いました。なぜならば、質問事項に女性と指定がある時は必ず、後退するように指示がありましたし、実際に先頭には男性が立っていたからです。そしてこの事実には深く考えさせられました。

その後、二人一組になり、結核、腸チフス、マラリア、コレラなどといった特定の病気について、実際にどの程度普段知っているのかを確認するゲームを行いました。参加しているメンバーは、学歴もあり、医療情報へのアクセスなどにも恵まれている人たちです。しかし、実際には知識があやふやであったり、誤解していたりといったこともあります。ですから、医療に関しても教育が必要であるということでした。（はるこ）



■料理や選択に必須の水運びは、女性のお仕事！

ある日の午後、私たちは「コミュニティ」で地域の人たちと話をし、家にもお邪魔させて頂きました。

私たちは家庭内における水の使い方について話を聞きました。家の中で水を出しっぱなしにする人は誰もいません。全ての水は地域にある一つの井戸から使われているのです！私たちも彼らが日々どう過ごしているかを体験しました。

まず、ポンプで水をくみ上げ、持ってきた水がめに水をいっぱいいれます。頭の上にドーナツ型のクッションを置き、その上に水がめを置いて運びます。水がめは重く、首や背中にも重みがかかるので大変でした。水がめは両手で支えていなければいけません。ここに住む女性はこんなことを家族のために一日に3、4回繰り返しているというのを聞いて驚きました。

この体験を通して、私たちは簡単に水が使えるのだと気付かされました。今まで何も考えずシャワーや歯磨きの時に水を出しっぱなしにして水を無駄にしていました。この女性たちは本当に大変だと思いますが、家族の為にやらなければいけないのです。地域の血液とも言える水はとても大切に母親たちは献身的に何往復も水を運ぶのです。(David)



何度もポンプを動かすのは結構体力が必要です・・・



ヨガ

3日間のうち1日しか参加できませんでしたが、1日だけでもとてもすっきりしました。インドに行くまで、ヨガってしたことがなくて、“ヨガ＝疲れる”って思っていて、楽しくなさそうって思っていたけど実際はそうじゃなくて、ヨガがとても身近に感じました。

私は体が硬いので、なかなかできず悪戦苦闘でしたが、周りの方たちは、すごく上手で羨ましかったです(笑) 私的には、私たちがしたヨガは、よく見かけるようなポーズのヨガではありませんでした。でもとても楽しいし、まだ覚えているので日本に帰ってきてからも少ししています。

インドの人は、こんなことをしているのか！と思うと気分だけでも中国雑技段に入れそうでした(笑) いつかまた会えたら、もっと教えてほしいです。(りの)



■ウダワド村のお家でパン作りを体験しました

学校から徒歩5分ほどのお家へ訪問しました。農村の一般的な家庭は、8人ほどの家族構成で、全員が糺（ただ）になれないほどの家の広さです。

お話を伺った女性は、12歳のときに結婚してウダワド村へ来たため現在20歳。村では15歳になったら成人として扱われますが、自分の年齢を知らない女性もたくさんいるそうです。インド政府より発表されている出生率や死亡率などの統計数字は、ウダワド村のような地方の村は調査対象に含まれない場合も多いのであてにななりません。何歳で生まれて何歳で亡くなったかを自分でも知らず、行政も把握していない実態を目の当たりにして、国としての機能の弱さに無力感を感じました。

そして、女性に教わりながら一緒にチャパティというインドのパンを作りました。小麦粉と水を手際よくこねて、丸めて、薄く伸ばして、1枚ずつ火にかけてクレープのように焼きます。これがチャパティです。食事の作り方をはじめ、親戚やコミュニティへの接し方などは母から娘に受け継がれていくそうです。

男性は力仕事、女性は家事という役割分担が明確のため、料理は彼女の仕事です。訪問したときは、村の年配の方々や外人の特に男性に囲まれて緊張しており、とても恥ずかしそうにチャパティを作ってくれました。普段は近所の方々とフォークソングを歌いながら料理をしているそうで、村の人々同士は非常に仲がよく、和気藹々と協力している様子が伺えました。

しかし、もちろんガスがなく室内で火を起こすため、家の中が煙で充満します。窓も換気機能はなく、健康に害が及ぶことがわかりました。牛やヤギと出会ったのですが、雨の日は家畜も家の中に入れるそうです。短い時間しかいない私たちも空気の悪さに咳がでたり息苦しく感じました。ここで生活していると気管が悪くなるということはすぐに体感して分かりました。とても体によい環境とは言えません。

インドの結婚について質問したところ、同じ村の人が結婚することはないとのこと。女性が男性にお金を払うダウリーという文化があり、女性の家族が男性に結婚の申し出る形式が大半で、自由恋愛で結婚はありません。

もし自由恋愛で結婚する場合は、自分の持つものをすべて投げ出して家をでる駆け落ちの状態とのこと。思わずロミオとジュリエットのワンシーンが頭を巡りましたが、頭でわかっていてもこれが現実とは受け入れ難い事実でした。

家と家の結びつきを重視する文化背景から離婚は滅多になく、子どもが生まれている場合は絶対に再婚できません。こういった質問を通じて、FTCインドのスタッフは、「年配の方々の考えや文化は変えられないけれど、子どもたちは教育によって変えることができる。」と仰っていたことが印象的です。（みさこ）



チャパティ作りを体験中



家の中。料理をすると煙が充満。

■キレイな水が飲めない人々は、世界で約 11 億人も……

夕食後、人間に不可欠な水について学びました。水の資源が豊富な日本ですが、キレイな水が飲めない人々は約 11 億人。特に子供たちはその水が原因で命を落としています。

また、将来的に水不足が懸念されています。先進国ではどれだけの水を使っているのか。アメリカでは 1 日 450ℓ、日本では 350ℓ。ウダワド村の人々とはいうと、1 日 10ℓ だそうです。

自分達の生活状況を見直し、水の将来も考え、そして今僕らは何をすべきか。考えないといけないところまでできているのかもしれない。

そして僕らは何をすべきか。みんなで何ができるかを話し合いました。シャワー中や食器洗い中、歯磨き中はできるだけ水を流しっぱなしにしない、洗濯機は風呂の水、お風呂の水でトイレを流すなどなど。真剣に考えないといけないところまでできているのかもしれない。（けい）



ヒンディー語レッスン

ウダワド村に滞在中、1 回 30 分間・全 3 回のヒンディー語レッスンに任意で参加できました。Rajdeep 先生は、大学でサンスクリット語などを専攻しており、現在はフリー・ザ・チルドレンの派生団体である Me to We という団体のスタッフ。私たちの毎朝のヨガの先生でもあります。

すぐに使える簡単な挨拶や言葉を教えてもらったおかげで、子どもたちとコミュニケーションをとれてインドをより満喫できました。

しかし、デリー在住のラウルさんに「suprabhat（スプラバート。おはようの意）」と挨拶すると「？」。発音が悪いのかと思い連呼していると「ああ！それは昔の言葉！」今は高齢の方々しか使わないとのこと。

ウダワド村の子どもたちにはしっかり通じたのですが……。ちなみに、インド人の 40% が使う公用語はヒンディー語。「ナマステ！（こんにちはの意）」が「おはよう」「こんばんは」まで幅広い意味を持っています。たくさんの挨拶を教わりましたが、ひとまず「ナマステ」を覚えておくと最初の挨拶は完璧のようです。



■子どもたちに“サッカー”をプレゼントしました

新しくできた教室内で、ホシノドリームズプロジェクトから送られた紙芝居の紹介や、サッカーボールの紹介をしました。

あいにくの雨天で、計画していた外での子どもたちとのサッカー交流はできませんでしたし、また持っていったサッカーボールがパンクしていて、ゲームができませんでした。空輸便で送って下さったホシノドリームズプロジェクトからの支援物資は、ウダイプールのFTCインドのオフィスには、届いたのですが、現地スタッフの家族が急病となり、支援物資を日本のスタッフがいる間に持ってきてもらうことができず、直接物資を紹介することができませんでした。

後日、学校や生徒に寄贈しているところを写真にとって送ってもらう予定です。紙芝居は、日本語で晴子さんが、次に英語でデビッドさんが、そしてヒンディ語でラージディーブさんが、通訳しながら、とても表現豊かに、鮮やかに話したので、子どもたちはとても興味津々に聞いていました。ちょっと話が長くて、最後の方は集中力が切れてしまったようですが、みな熱心に聞いていました。

次にスタツア参加者を代表してりのちゃんとジョナサンが、とてもすばらしい感想を話してくれました。ふたりとも、とても素敵なスピーチでした。

校長先生のお礼のお話があり、折り紙と絵本などのプレゼントを渡し、フェイスとゼインのギターに合わせてスタツア参加者全員で歌を歌い、子どもたちもドラムを交えて歌ってくれたりして、後は大騒ぎと、歓声の中、村の子どもたちとみなさんに、お別れを何度もしながら、記念写真を撮り、名残惜しみながらウダワド村を後にしました。（トム）



サッカーボールを手にして早速遊びだす子どもたち



■1日1ドル1以下で暮らすってどんな状態？

収入向上が家族にとってどのような影響を与えるのかについて考えるため、フリー・ザ・チルドレンのスタッフであるBrandonによるワークショップを3つのグループに分かれて行いました。以下の状況で生活している気持ちになって、一家の収入（所持金）で何を買って生活していくかを考えました。

(ケース1)

あなたは6人家族の親です。子どものひとりが遊んでいるときに制服をびりびりに破いてしまいました。学校へ行くには新しい制服が必要です。今週は280ルピーしかありません。

(ケース2)

あなたは4人家族の親です。今週はお祭りなので羊の肉を買いだいたいと思っています。どうしましょうか。今週は280ルピーしかありません。

(ケース3)

あなたは5人家族の親です。子どものひとりが病気になったので薬が必要です。買わないと学校へ戻れません。今週は280ルピーしか使えません。

ケース1のグループは、手持ちの280ルピーで250ルピーの制服を買わずに、小麦やじゃがいもなど食料を購入することにしました。これでは子どもが学校へ通えないので、「今週は買えないけれど少しずつお金を貯めて買おう」という意見を出しました。しかしよく考えてみてください。10ルピーを毎週貯金すると、250ルピーの制服を買うまでに半年間かかってしまいます。その間、子どもたちは学校へ行くことができません。

制服が買えるかどうかで学校へ行くという選択に迫られますし、日々の食事が家計に大きな影響を与えることが分かります。そのため、学校で給食が出ることは子どもたちに教育と栄養を与えるとともに家計の支えにもなります。

ケース2のグループは、お祭りのために150ルピーを払って羊の肉2食分買うことにしました。お祭りを優先して所持金の約半分を使い、残りの130ルピーでじゃがいもや塩、チャパティーの粉などを購入しました。お金は残っていません。残金で買えるものだけを考えて、栄養分のことを考える余地はありませんでした。

ケース3のグループは、70ルピーを払って薬を買いました。これで子どもは学校へ行くことができます。しかし、薬をなんとか購入するお金があってもこの村の近くに薬局はありません。子どもの薬を手に入れるためには、親と一緒に往くなくてはならず、歩いて1～2日間かかります。この間、働けません。さらに、発展途上国では薬を購入できても、薬効期限のきれたあまり効果がない薬を渡されてしまう可能性もあります。

なお、280ルピーは日本円にして約450円。1カ月間（4週間）で約2000円程度です。これは、絶対的貧困（1日1ドル以下の生活）を表しています。絶対的貧困層は世界に12億人、また世界人口の約半分にあたる30億人は1日2ドル未満で暮らしているといわれています。

このワークショップを通じて、ある参加者は「この問題は簡単ではないが、頭を使えばできることだと思う」と感想を述べました。確かに、日本の小学生がお小遣い帳を書くように紙に書き起こして、今月のお小遣いと欲しいものの値段を簡単な算数で足し引きしていることを考えるとさほど難しくはないでしょう。

しかし、小学校へ行ったことがない人が親だったら・・・？
紙もペンもない状況で同じようなことはできるのでしょうか。

1日1ドル以下の生活から抜け出したい！という思いで、首都のデリーなど大きな都市へ移動する人もいますが、仕事が見つからなかったりして結局スラム街に行き着くことも少なくありません。

教育も子どもの栄養も大切。誰もが思うことですが、収入の少なさによって日々難しい選択に迫られること、一家の収入が及ぼす教育への影響や関連性について改めて考えさせられるワークショップでした。

(みさこ)



■ひとりひとりが持つリーダーシップを発揮するために…

最終日の夜、参加者とFTCスタッフ全員で、この旅を通じて気づいたお互いの良いところを共有する“はげましサークル”を行いました。

「あのときは、もっとこうすべきだった」「もっとあなたのこの部分を直した方がいい。」という発言ではなく、旅で気づいたその人の“いいところ”に焦点を当てて、もっとその強みを伸ばしていけるように一言ずつ伝えていきます。

私も皆が囲む円の真ん中に座り、視線を一身に浴びながら、褒められ続けられましたが、なんともこそばゆいものです。自分が気づかない、意外なところを見られているものです。

約3時間に及ぶあたたかい会の中、在インドスタッフのBrandon（カナダ人）からRajdeep（インド人）へのメッセージは印象的でした。Brandonは3か月前にケニアからインドへ異動してきたため、知り合いもおらず、現地の支援も手探り状態の中、Rajdeepの優しさに助けられたそうで、男の友情には涙腺が緩みました。2人は国籍を超えて協力しあうことで、ウダワド村の人たちと一緒にもっと村をよくしていけると心から思いました。

また、“はげましサークル”とは別に“あったかノート”も書きました。ツアー中、一人一人へメッセージを小さな紙に記入して、最後の日本に着いた空港で互い交換しました。その折りたたまれたあったかノートを開いて読むのは、元気でなかったり、くじけそうになったとき。参加者全員が、今回の旅の経験の重みがぎゅっと詰まったお守りにを得て、これから自分にできることを頑張ろうと決意新たにしたことでしょう。

……しかし、読んではいけないと言われたときこそ読みたくなるもの。帰りのバスの中でこっそりすべて読んでしまったことを懺悔しておきます。（みさこ）



インドの食事

インドの食べ物は僕が今まで食べてきたアメリカの料理とは違っていました。見た目は、どのお皿を見ても同じような色の料理でしたが、食べるととても美味しかったです！見た目は同じに見えても使うスパイスで味が違い、味も違いました。

宗教上の理由で、牛肉を使った料理は、ほとんど無く、野菜や豆、鳥肉や魚を使った料理が多かったです。そして、食事の最後はチャイで締めくくると感じる感じでした。私は、この甘い味とコーヒーのような色のチャイが好きでした。

ですが、同じような料理ばかりだったので、最後の方は少し飽きてきてしまい、インドでの旅行のあとはアメリカ料理を食べたくなりました。でも、インド料理は本当にとっても美味しかったです！



■なくなる児童労働。世界に2億2200万人。

8日目にウダイプールで児童労働をしている子どもたちに会いました。初めにFTC インディア代表の女性、Shobha (ショバ) から多くの人が明るい未来を夢見て周りの村からウダイプールにでてくるのだという説明を受けました。

私たちの会った家族は、母親と子ども3人で働いていました。父親はいつもお酒を飲んでいて、子どもや母親に暴力をふるうような人だったそうです。その父親がいなくなった後、母親と子どもでウダイプールにでてきて、母親が引き継いでいる技術を使って、象の置物を作り生計を立てているとのことでした。

象の置物は観光客に売っており、売れない日もあるため、毎日収入があるとは限らないようです。また、決まった仕事場所があるわけでもなく、この日は雨だったため、屋根のある場所で作業をしていました。

母親が大きな石を置物のサイズに切り、子どもたちがそれを削って象の置物にしていっていました。兄たちだけではなく、まだ幼い妹も石を削って置物を作っていました。

兄たちは義務教育の年齢を過ぎてしまっているため、学校に行くことはもうできませんが、まだ幼い妹だけでも学校に行かせたいと母親は考えており、周りの人の支援もあって、妹は学校に行けるようになりそうとのことでした。

実際に象の置物を作らせてもらいましたが、象の置物を作るのは細かい作業が多く、とても難しかったです。しかし、兄たちは簡単そうに置物を作っていて、今まで毎日ずっとこの置物を作ってきたことを感じました。

また、児童労働と聞くと工場や炭鉱で働かされているというイメージが大きかったのですが、このように親と一緒に働いているような子どもがいることを知り驚きました。

児童労働は、商品を安くするために子どもに労働させようとする工場の経営者、賄賂をもらい児童労働を黙って見逃す警察や政府の人間の問題だけでなく、家族で働かざるをえないということはインドの文化や社会そのものの問題であると実感させられました。(しおり)



私たちが出会った子どもたち

■子どもたちの素敵な笑顔と悪ガキっぷり(?)は世界共通？！

どの村のコミュニティも笑顔がとても輝いていて素敵でした。皆一人ひとり、『力が強い』とか『走るのが速い』とかっていう特技があって、すごくよかったです。

ライ村のコミュニティの子ども達とは1回しか会ってないけど、会ったときからとてもフレンドリーで私たちの手を引っ張って話しかけてくれたり、ヒンディー語で名前を教えてくれたり、ハイタッチをしたりと様々なことをしました。

校門で歓迎してくれたとき、笑顔で迎えてくれてとても安心しました。皆とても目が輝いていて、きれいでした。校庭にハーブが植えられていて、それを子どもたちが毎日食べると聞いてびっくりしました。食べてみるとなおさらびっくりで、とても苦かったです。

ウダワド村のコミュニティでは1回目はなかなか話しかけてくれず、とても恥ずかしがっていましたが2回目となると大はしゃぎで、ライ村と同じく手を引っ張って話しかけてくれたり、ヒンディー語を教えてくださいました。ただ、私たちの手を強く叩いたり、かぶっている帽子を取ったり水をかけたりと、男女共に悪ガキっぷりは日本と変わりませんでした(笑)

ライ村と同じく目が輝いていて、いろんな事に興味津々でした。特に日本から持ってきた、折り紙や絵本が人気でした。

でも、家や個人の環境が悪いのかなというところもありました。靴を履いていなかったり、制服が破れていたりと、たんぱく質が足りず髪の毛が赤茶色かったり、と輝いている笑顔の中にもさまざまな問題がありました。

なぜ髪の毛が赤茶色いかというと、たんぱく質はお肉にたくさん含まれているけどお肉が食べられない子が多いし、豆からも、とれるそうですが多く食べないと取れないので赤茶色いそうです。

私はそれを知ってから『あんなに元気なのにそんな問題があるのか』と日本では考えられない問題に衝撃を受けました。

それでも子どもたちは笑顔で、一緒にカバディをしたり絵本を読んだり、折り紙を折ったり、好奇心旺盛でした。勉強に関しても熱心な子ばかりでした。

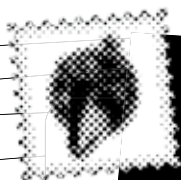
悪ガキすぎる！という子の教科書やノートをこっそり見ると、びっしりアルファベットやヒンディー語の練習をしていました。中には私たちと遊んでいるときも机に向かって一生懸命に勉強をしている子が居ました。

インドの子どもたちと日本の子どもたちとの違いは先ほどから書いているように、目の輝きだと思います。輝きもそうだし、向いている方向が違う気がしました。

だからといって日本の子どもたちはだめなのかというと、そうではありませんがインドの子どもたちは純粋な目をしていて心がとても豊かなんだと思います。

私はそんな子ども達が、どんな道を歩んでどんな風に生きていくのか、未来が楽しみです。(りの)





FTC インディア代表 Shobha からのメッセージ



FTC インディア代表
Shobha (ショバ)

ナマステ（こんにちは）！

みなさんのサポートに、インドから感謝の気持ちを送ります！

フリー・ザ・チルドレン・ジャパンはフリー・ザ・チルドレンにとって、重要な柱の一つです。みなさんはずっとずっと長い間、熱心にサポートをしてくださっています。みなさんの寛大なサポートを、インドのみんながとても喜んでいます。本当にありがとうございます。

みなさんが支援してくださったお陰で、ウダワド村には学校が建設され、ウダワド村のサポートの半分が終わりました。しかし、自立への道はまだ半分残っているということも、ぜひ忘れないでください。

いつの日か、インドで会える日を楽しみにしています。

それが難しい人には、このメッセージを、愛を込めて届けます。

ダンニャワード（ありがとうございます）！

Namaste FTCJapan! Namaste and danyawad from India for all of your support. We love you so much. FTCJapan is one of I think the greatest pillars of Free The Children. You have been dedicated and dedicated for so long to be able to support. And we are so happy that right now in India, we are able to receive all of your generosity. And again, please remember that our work is only half done. Half of the work is done by all of you so thank you so much and we hope to see you here. And if not, then we are sending you all of our love. Namaste and danyawad.

Free The Children
South Asia Program Coordinator India

Shobha K. Sharma







おまけの

他己紹介



★山田梨乃 (りのちゃん)

- ・努力家で、ユーモアのセンスは抜群！
- ・ツアーの年少者だけど、みんなと打ち解けていて、色々と学んでいました。私たちのダンサーでした！
- ・よく笑い、よく遊び、とにかく元気なダンサー♪ 飛び出る爆弾発言は要注意。
- ・勇気とパワーの14歳。笑い転げる姿が可愛い？ 発言は大胆・・・かも？！
- ・勇敢で一途！ひとりででも怖くないわ！ でも本当はとっても繊細多感な女の子。
- ・ダンスが上手！
- ・自分の話に説得力を求めるために参加した情熱家！

★Zane Garrett Halverson (ゼイン)

- ・心が広いルームメイトであり、最高のウクレレ・プレイヤーです
- ・彼とフェイスはこのツアーの素晴らしいミュージシャンでした。楽しそうに作業をしたり、インドの文化にも自分から入ってっていました。
- ・一見シャイと見せかけて、心は情熱のロックンローラー
- ・暖かく穏やかな笑顔の持ち主。笑顔の下にはあふれる情熱を持っています。
- ・めちやくちゃ楽しい、踊って歌える牧師さん！
- ・タフで静かで力持ち。アメリカの金太郎さん！未来のミュージシャン！
- ・音楽への熱い想いがある！
- ・優しい、力持ち、歌ってギターも弾ける！音楽などにとっても熱い素敵なアーティストさん☆
- ・ママが出来るほど頑張るヤング・ミュージシャン！

★Jonathan Kent (ジョナサン)

- ・旅立つ前は不安で、行くのを止めようとしていたぐらいだったのに、現地では大活躍でした！本当によく働いて、素晴らしかったです。
- ・永遠のティーンエイジャー。心清らかで優しさはジェントルマン。
- ・この旅一番のチャレンジャー。シャイな笑顔と素直な心が魅力的です。
- ・純粋で心優しい、天使のような男の子！
- ・自分の思ったことをちゃんと伝えられる！
- ・ジェントルマン！何をしても全然怒らない優しい人。心がきれいで、実は陽気な人。
- ・ハーブ・ガーデンのために岩を壊し続けたストロング・マン！

★佐藤 美紗子 (みさこちゃん)

- ・何があっても絶対に！！微笑んでいる人！
- ・クールな仮面の下に優しさと強さがにじみでている密かに頼れる存在。
- ・特異な視点のアナリスト！心の中に常にハードロックが響く熱きマラソンランナー！
- ・自分から積極的に色々な事に関わろうとする！
- ・楽しみながら、その日のテーマ等についてしっかり考えている！
- ・一番小柄な女の子だったけど、エネルギーに溢れていて、一番作業をしていました。話しも面白い人です。
- ・笑いのツボを、すぐに見つけた方！周りの人の特徴を見抜くすごい視点の持ち主。

★三箇山 志織 (しおりちゃん)

- ・どういう風に人と話をするかを知っていて、一緒に話をする事で相手を大にできる人です。
- ・小柄だけど、エネルギーと優しさに溢れています。彼女も子どもとすぐ仲良くなり、一緒に遊んでいました。
- ・博識で勉強熱心！かと思えば、子どもと真剣に戦う(?)遊び心を備えたパワフルなお方♪
- ・あふれる好奇心旺盛と豊富な知識。前進あるのみ！のパワーにあふれた存在。
- ・子どもにかいっぱいぶたれても笑ってられる驚異人！笑顔が素敵な女子大生。
- ・お姉ちゃんみたいで器が大きい人。笑顔が素敵で、常笑顔で過ごす優しい。
- ・子どもに叩かれても怒らない、心優しい大学生。

★飯塚 景介

- ・聞き上手でカバディの名選手です！
- ・遊びが得意！子ども達と一番たくさん遊んでいました。すぐに仲良くなっていて、子ども達も彼の事を気に入っていました。
- ・着々と自分のペースで自分の考えをもって我が道を進む。子どもに大人気の先生♪
- ・手先の器用さと値切りの上手さはメンバー（いち）？！
- ・クールな修験道者！世界を旅する風来坊！
- ・自分の考えを持っている！
- ・おもしろくて、話せる人！お兄ちゃんみたいで、一緒にちよけたりできる人
- ・子ども大好き、情熱に燃えるイケメン・ミュージシャン！

★猿渡 晴子 (はるこさん)

- ・とても親切で思いやりがある人です。いつも周りにいる人のことを気にかけています。
- ・女の子たちの面倒見がよく、必要な時は励ましの言葉や指示も与えていました。愛情あふれる優しい人です。
- ・時に優しく、時に厳しく(?)、みんなのことを温かく見守ってくれる頼りになる母。
- ・世界の子どものお母さん！完璧キウで、ずっけた所もあって少し安心！
- ・視野が広い！
- ・お母さん（笑）みんなのお母さんで、しかもアクティブ！色んなアドバイスをしてくださるしサポートしてくださる。しかも面白い！
- ・どんな人にも礼儀正しい大和撫子

★David L. Smith

- ・良きチーム・プレーヤーであり、いつも周りにいる人を励まし、雰囲気が明るくなるようにしてくれます。
- ・シェイクスピア級のユーモアとウィットを持ち、マシンガントークを繰り広げる優しい神父さん。
- ・アメリカン・ギャグの第一人者！皆を笑いの渦に巻き込んでしまいます。
- ・ムードメーカー！
- ・めっちゃ面白くて、すごく楽しい！ジョークがはんない、でも自分の意見をしっかり持っていて素晴らしい牧師さん。
- ・ずっとなべり続けて、みんなを笑わせてくれる！

★伴野 保志 (トムさん)

- ・いつも微笑んでいて、熱心に新しいことを学ぶ人です。決定的瞬間を逃さず、ビデオで僕たちの旅の記録を残してくれました。
- ・子どもと話す事が大好きなカメラマン！
- ・マイペースな爆走ランナー。ゆったりした雰囲気と超絶エネルギーの持ち主。
- ・いつも優しい笑顔の頼れる存在
- ・博識！
- ・とても優しい方。すごく持しやすい！ヨガも教えてくれたり色んな事を教えてくださるとてもいい人。
- ・最年長で一番純粋で若い人！いつもニコニコ笑顔！

★町井 望のんちゃん

- ・皆がインドに着く前から、旅行がスムーズにいくように準備をしてくれました。僕たちがいつどこで何をするのかをアレンジしてくれました。
- ・スタッフのコーディネーターにぴったりな、優しい性格です。何かを押しつける事は一回も無く、気楽に励ましてくれました。
- ・10年前にインドを訪れて以来、ずっと活動し続けて現在 NGO スタッフに。そんな信念貫く強さを持つお方。
- ・のんちゃんの周りにいる人は皆幸せな気分になります。
- ・優しいFTCJのお母さん！いるだけでいつも心が和む。
- ・優しい笑顔が素敵！
- ・すごくサポートしてくださる方。喋ってたら、楽しいし、すごく和む！いてくれるだけでもありがたい
- ・視野が広くて、みんなを優しく引っ張った！

★フェイス

- ・信頼のおけるリーダーであり、良き友達！ついついつられて笑ってしまいます。驚きのブルーヘアー！
- ・チームの引率も、紬葉も素晴らしく、チームにとって、本当に良い祝福でした。
- ・猫好きなどうぶつもん。まだまだ謎と特技が彼のポケットに秘められているでしょう。
- ・Faithを見ていると皆自由な気分になります。
- ・頭の回転はスーパーマン！青い立った髪の毛はどこでもインド人の注目の的。
- ・ずっと通訳を続ける集中力がすごい！
- ・皆さんを仕やってくださる素晴らしい方。日本語と英語、両方の通訳をして頭の中がすごい！髪の毛が青いし、インドに行くとはや芸能人！？

★ Special Thanks

翻訳にご協力くださった FTCJ 翻訳ボランティアチームのみなさん、ありがとうございました！

小坂めぐみさん、堤厚子さん、沼田侑己さん、浅田紀子さん

今、あなたにできること！

FTCJの活動をご支援ください。

寄付で
終わりにじゃ
ない！

な流・文通しよう！

せっかく寄付をするなら、支援先の子
もと交流しませんか？「支援者と被支援者」
の関係をかえて、フィリピンとインドとモンゴル
の子どもたちと「ともだち」になりませんか？

手紙をお互いに交換して、友達 **参加費 12,000 円（年間）**
になって、理解を深めていき
ましょう♪

※お振込みは、団体口座に1年分お振込みいた
だくか、3ヶ月ごとの自動引き落とし（月1,000円、
月2,000円）のどちらかとなります。

キッズパワー募金をする！

ご指定の銀行口座・郵便口座から
定額のご寄付を自動引き落としでできる募金制度です。

手数料無料！

一括か年4回の分割でのお支払いをお選び頂けます。

ご寄付は FTCJ が支援する子どものために使用します。

学生…年 3,000 円／社会人…年 12,000 円

／法人…年 30,000 円

フェアトレードでショップ！

FTCJ の支援先であるフィリピンやインド、
モンゴルで作られた商品を販売して、その利益を
現地の子ども支援に還元します。お買い物で国際協力
ができるんです。ぜひ、お買い求めください。

FTCJ ショップ → <http://ftcj.ocnk.net/>

●ジュースバック 450～1,800 円

●無添加フェアトレード・ドライマンゴー 500 円 など。

世界の子どもに寄付をする！

●インド● 学校建設、井戸設置、医療ケア、
村人の収入向上などの活動を行なっています。

●モンゴル● 子どもが本を読んだり勉強できる
環境づくりに取り組んでいます。

●フィリピン● 貧しさのために体を売らなければ生きて
いけない子どもや少数民族の子どもが、勉強をしたり栄
養あるご飯が食べられるよう支援しています。

◆郵便振替 郵便口座 00120-5-161532 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

◆銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行 上野支店 普通 5360502 特定非営利活動法人 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

子ども
の
力
になる

FTCJ では積極的にアクションを起こすことで、「世界の子どもを応援したい！」「子どもの権
利を守りたい！」という小学生、中学生、高校生、そのほか学生のみなさんを大募集中!! メンバ
ーになってより良い世界をつくるためにともに活動しませんか？メンバー登録無料です。必要な
のはあなたのやる気だけ！

■ニュースレターを購読する！

活動の情報満載のニュースレター購読ご希望の方は、お名前やご住所をご連絡頂くとともに購読料年 1,000 円をお
振込みください。

フリー・ザ・チルドレン・ジャパンは、
「子どもによる子どものため
の国際協力団体」です。

「Kids Can! (こどもだからこそ
できるんだ)」を合言葉に、
18 才以下の子どもが主体的に、
国際協力活動に参加しています。

Free The Children Japan

インドスタディツアー 2011 夏 報告書
『INDIA STUDY TOUR 2011 Repot』

●発行元

よくていみりかつどうほうじん
特定非営利活動法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

① FTCJ 事務局

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山 6-6-5 3F

03-6321-8948

03-6321-8948

info@ftcj.com

<http://www.ftcj.com>

※ 2011 年 5 月に移転しました。
電話 & FAX 番号も
変わりました。

